慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『流刑地にて』に見られる犯罪予定者の二重生産：生来的犯罪者と非行者
Sub Title	Doppelproduktion des voraussichtlichen Verbrechers ,,In der Strafkolonie" : geborener Verbrecher und Delinquent
Author	寺田, 雄介(Terada, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.26 (2009. 3) ,p.32- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20090331-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『流刑地にて』に見られる犯罪予定者の二重生産
－生来的犯罪者と非行者[1)]

寺田雄介

1　はじめに

ある学術探険家が流刑地を訪ねたとき、現司令官の勧める招待を受け入れて、一人の囚人の死刑執行に立ち会うことになる。不服従と上官侮辱の罪で罰せられるこの囚人の処刑は、禿山に囲まれた小さく深い谷間で行われるが、探険家の他には囚人と士官と兵士が一人ずついるだけで、他に観客はいない。処刑機械に付いている針は、判決の図案に従って 12 時間もかけて囚人の身体に判決を刻み込む。囚人は自らの身体に刻まれた判決を解読するが、最期には完全に刺し貫かれて死に至る。この残酷な処刑方法は前司令官が発明したもので、新司令官はこの制度に反対の立場をとっており、同じく「ヨーロッパ的思考法」[2)]をもつ学術探険家の視察を受けたうえで、撤廃しようと目論んでいる。しかし前司令官の唯一の擁護者である士官は、この処刑を存続させるために自分の後押しをするようにこの探険家に頼みこむ。探険家がそれを拒むと、士官は囚人を解放して自らの身体を処刑機械に横たえて、機械を作動させる。ところが、雑音が聞えたかと思うと、機械は徐々に壊れはじめ、図案を書くのではなく単に士官を刺し殺してしまう。

---

1)　本稿は、2008 年 6 月 20 日に慶應大学三田キャンパスにおいて開催された藝文学会研究発表会での発表原稿を基にしている。

2)　Kafka, Franz: In der Strafkolonie. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.1. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.180.
なお、本稿ではカフカの既訳にこだわらず、引用に関しては全て訳出し直した。

『流刑地にて』の初稿をカフカが書き上げたのは 1914 年の 10 月初旬である。同年 8 月に着手した長編『審判』が頓挫をきたしたために、「長編を前へと駆りたてるため」[3] の休暇を 9 月にとり、そこで一気にこの短編を書き上げた。『審判』と『流刑地』の両作品を比較すると、時期的な関係だけではなく、内容の点でも著しい共通性を含んでいることがわかる。『審判』のヨーゼフ・K と『流刑地にて』の中で死刑に処せられる囚人が、ともに有罪宣告を受けるという点だけではない。二つの互いに対立する世界の対比的提示という、構成上の共通性が見てとれるのである。『審判』におけるヨーゼフ・K と裁判組織に属する人々との関係は、『流刑地にて』における学術探険家と士官との関係に対応していると考えられる。

一見すると、『流刑地にて』では学術探険家と新司令官の「ヨーロッパ的思考法」と、士官と前司令官の反「ヨーロッパ的思考法」とが対立して描かれているように見える。この「ヨーロッパ的思考法」という言葉はカフカが本文中で用いているもので、前時代的な処刑機械を用いた残酷な処刑に反対の立場を表している。ちょうど第一次世界大戦が勃発したころ、ドイツの同盟国であったオーストリア＝ハンガリー帝国は海外領土を持たず、ドイツは植民地を持ってはいるものの、流刑植民地は有していなかった。一方、協商国側のイギリス、フランス、ロシアの三国はいずれもが流刑植民地を有していた。ドイツ側は当時そのことを戦時の情報戦の一端として国策宣伝に用いたが、そこには学術探険家の役割に相通ずるところがある。

この作品に関して、カフカの作品を人間疎外のテーマで解釈したヴィルヘルム・エムリヒ Wilhelm Emrich（1909-1998）は以下のように評している。

> この物語は、「人間的なもの」に関する、私たちの慣れ親しんだ、好きになった、悪意のないあらゆる概念を逆さまに立てることによって、

---

3) Kafka, Franz: Tagebücher Band 3: 1914-1923. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.11. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.39.

4) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1957. S.220-

人間の真理に取り組んでいる。この物語はまた、カフカの他の物語にはないほど徹底的に、「古い」裁判秩序と「新しい」裁判秩序の矛盾を、すなわち今昔の掟の矛盾を展開している。[4)]

「古い」裁判秩序と「新しい」裁判秩序、または「昔の」掟と「今日の」掟。表現は違うものの同じ二項対立を形成している。しかし、一方が人間的な所行でもう一方が非人間的な所行であると決めつけるのは、いささか拙速であるように思われる。確かにこの物語の主人公は学術探険家であり、彼の視点によって批判的に処刑機械が描写されている。そして、士官の自己処刑の最中にこの処刑機械は故障し、崩れてしまう。ところがそれらの描写が、新司令官の導入しようとしている近代以降のヨーロッパ的制度の正義を保証しているわけではない。それは、探険家が「訴訟手続きの不当性と死刑執行の非人間性は明らかだ」[5)] としながらも、士官の説得に心を打たれて動揺し、「あなたの誠実な信念は私の心に響きました」[6)] と胸中を吐露しているところからも明らかである。

しかし我々読者の記憶に残るのは、この二項対立の結果として下される判決の是非よりも、むしろ公開処刑の描写そのものである。有罪者の皮膚に判決文を刻み込むという、従来の処刑手段とは一線を画するこの処刑機械の残虐性と非能率性、殺風景な流刑地で装飾的な作業を行うという滑稽さ、そして受刑者が最期に浄福の表情をなすという不可解さ。これらにこの作品の異質性が潜んでいると言えよう。

2　処刑の残酷性と生来的犯罪者

このように『流刑地にて』を処刑描写の点から論じる際に頻繁に比較されるのは、フランスの急進的ジャーナリスト、オクターヴ・ミルボー Octave Mirbeau（1850-1917）の『責苦の庭』という作品である。これは、

221.

5) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.175.

6) Ebd. S.186.

7) オクターヴ・ミルボー：『フランス世紀末文学叢書 5　責苦の庭』、篠田知和

フランスの学術探険家がシナの処刑場で見聞した出来事を描写したもので、その探険家が同地のきわめて「洗練」された「残酷さ」をもつ「美」的な処刑に、[7] 反発を覚えると同時に魅了されるという物語である。この作品は 1898 年から 1899 年にかけて執筆され、1902 年にドイツ語に翻訳されている。クラウス・ヴァーゲンバッハ Klaus Wagenbach（1930-）が著書『若き日のカフカ』の中で、カフカの蔵書目録にミルボーの名前を入れていることからも、カフカがこの物語を読んでいた可能性は高い。[8] しかし、カフカがミルボーから得た着想は、新旧二つの裁判制度を対立させることだけではないであろう。その外観は残虐以外のなにものでもない美的な処刑、もしくはその処刑機械を通して、人間の身体から一個の芸術作品を生みだすという発想だったのである。[9]

アメリカを代表するカフカ研究者であるマーク・アンダーソン Mark Anderson（1955-）は、イタリアの犯罪人類学者チェーザレ・ロンブローゾ Cesare Lombroso（1835-1909）がその著書『犯罪者論』の中で提唱した犯罪類型論を引き合いに出して、カフカの描く処刑機械について論じている。アンダーソンはこの処刑機械が囚人の背中に判決文を書き込む行為に着目し、その書き込み作業が、芸術創造の過程そのものを表していると述べている。次の引用は、囚人の背中に書き込む判決文の図案を、士官が探険家に見せている場面で、書き込む行為と芸術創造との関係が取りざたされる場面である。

> 士官は最初の一枚を見せた。探険家は何か賞賛するようなことを言いたかったが、彼はただ迷宮のような、互いに幾重にも交差する線を目にしただけだった、それらの線があまりに密に紙を覆っているので、白い隙間を見分けるにも苦労するほどだった。「読んでください」と

基訳、図書刊行会、1984 年、189 頁

8) クラウス・ヴァーゲンバッハ：『若き日のカフカ』、中野孝次・高辻知義訳、竹内書店、1969 年、195 頁

9) Anderson, Mark: Kafka’s Clothes. Oxford University Press. New York. 1992. S.178.

10) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.172.

士官が言った。（中略）「とても精巧ですね」と探険家が、あいまいに言った、「しかし、わたしには解読できません」[10)]

処刑装置が書き込む図案は、「解読できない」にもかかわらず「とても精巧な」ものだと探険家によって形容されている。この「精巧な」の部分の原文は „kunstvoll“ であるが、この „Kunst“ という単語は「わざ」「技能」の他に「芸術」「美術」という意味を持ち、それにより芸術創造の場面と解釈することが可能となる。[11)] ロンブローゾの類型論でもっとも議論を呼んだのは、犯罪者と芸術家を結びつけた点であった。正常からの逸脱はすべて、同質の退行現象がもたらす結果であると考えた彼は、詩人と殺人者、夢想の世界に遊ぶ芸術家と癇癪患者、天才と狂人を、同種の人間とみなしたのである。その一見すると相容れない二種類の人間の接合点にあるのは、まさに「書く」という行為である。この種の人間は、手近にあるもの全てに字や絵を書き込まずにはいられない「グラフォマニア」すなわち「偏執的書字人間」であるために、犯罪者というのは身体いっぱいに刺青をいれるのだ、とロンブローゾは説いた。これは見方を変えれば、刺青その他の身体的外徴を、内面に潜む犯罪的性格の「徴候」と捉えるのと同じことだと考えられる。[12)]

ところで、先に述べた『犯罪者論』は 1876 年に刊行されるやいなや、イタリアだけでなく全世界で成功を収めた著作である。この中でロンブローゾは犯罪を大きく二つの型、すなわち「身体的欠陥による犯罪」と「身体器官の外部にある原因による犯罪」に分類した。前者は「先天的な身体的欠陥」と「後天的な身体的欠陥」による犯罪行為であり、後者は社会、道徳、風土、食習慣などの影響の結果としての犯罪である。特にロンブローゾの関心を惹いたのは前者の「身体的欠陥による」犯罪者であった。彼はそれをさらに三つの集団に分類した。癇癪患者、背徳症（道徳的狂人）、精神病に疾患した精神薄弱者とくに生来性犯罪者である。この生来性犯罪

---

11) Anderson, Mark: Kafka’s Clothes. S.184.

12) Ebd. S.192.

者に見られる無数の身体的欠陥を、ロンブローゾは統計的に精査しており、その例は巨大な下顎や猿に似た顔つきから始まり、あらゆる外傷が頻繁に現れることまでを含んでいる。[13] このように、罪を犯す者には、必ずその身体に先天的な刻印があると考えたロンブローゾは、罪人の身体的特徴を「野蛮人」や「未開人」の民族に見出した。「全体として見ると、犯罪者はほとんどあらゆる種類の感受性が鈍い。正常な人間に比べると、一過性の犯罪者でさえもそうなのだ。（中略）犯罪者の身体が無感覚であることで、すぐ思いつくのは未開民族である。彼らは思春期の通過儀礼の時に、白色人種ではとうてい耐えられないような苦痛に立ち向かうことができるのだ。」[14] 犯罪者は苦痛をあまり感じることがない、というこの主張を、ロンブローゾは数々の実験によって裏づけた。ある犯罪者は片脚を切り取られても反応を示さず、切断されたばかりの脚をもてあそんだという。ある犯罪者はスプーンの柄で腹をかきむしり、またある犯罪者はガラスの破片で顔の皮膚を引き裂いたという。それだけでなくロンブローゾは、電流を通して苦痛を与え、その強さを目盛りに示す電気苦痛測定器を用いて、痛みの尺度を客観的なデータとして測定した。その測定器を用いて犯罪者 17 人、通常者 21 人を対象に電流を流してみたところ、通常者が示した苦痛の強さは平均 49.1 ミリメートルの上昇であったが、犯罪者では平均が 34.1 ミリメートルを超えることはなかった。[15]

彼が論証のために行ったこれらの残酷な実験は、『流刑地にて』の処刑機械が囚人に対して行う拷問的な仕打ち、そしてそれを甘んじて受ける囚人の描写と酷似している。

> そのようにして馬鍬は十二時間かけてますます深く書いていきます。最初の六時間のうち囚人はほとんど以前と変わらないように生き生きしていて、ただ苦痛だけを受けます。（中略）ここ、寝台の頭部にあ

---

13) ピエール・ダルモン：『医者と殺人者－ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』、鈴木秀治訳、新評論、1992 年、66-68 頁
14) 同上、59 頁
15) 同上、58 頁

る電気で熱せられたこの鉢に、あたたかい米粥が置かれ、囚人に食欲があれば、そこから舌でかすめ取るだけ食べることができます。この機会をのがす者はいません。（中略）六時間目になってようやく囚人は食事に関する喜びを失います。（中略）囚人は文字をひたすら解読しはじめ、まるで耳をそばだてるように唇をとがらせるのです。（中略）むろんそれは大変な作業です、この作業を仕上げるまでに、囚人は六時間を要します。[16)]

半日もかけて身体中に深い傷を彫り込まれるにもかかわらず、この処刑機械に横たえられる囚人たちは、通常者では耐えられないような苦痛を克服することができる。処刑が始まってから六時間はなお食欲を持ち続け、その後も苦痛のあまり意識を失うこともなく、自らに彫り込まれた傷から判決を解読するという。犯罪者は感受性が鈍くあまり苦痛を感じることがない、というロンブローゾの主張を認めるとするならば、流刑地で処刑されるこれら囚人たちの驚異的な忍耐力にも納得がいくのである。

したがって、カフカの『流刑地にて』で行われている処刑とは、「違法行為者」に犯罪相応の処罰を与えるものではありえない。そうではなく、内面に犯罪的性格をもつ者が、その犯罪を示す身体的外徴を皮膚に刻み込まれたあげく、その直後に命を奪われる作業なのである。勤務怠慢なうえに上官に対して非礼をはたらいたという罪のみで、囚人を死に至らしめるというのは、あまりに残酷過ぎる刑罰である。しかも、その囚人に下されるはずだった判決の図案は、結局のところ物語の中には登場しないまま終わってしまう。つまり、処刑機械が囚人に書き込む図案とは、過去に犯した罪の重さをはかる指標ではなく、その囚人の内面に潜み、将来犯罪として表面化する可能性のある「徴候」を、具現化したものだと考えられる。それは犯罪を抑制する機械ではなく、全く逆であり、いわば「犯罪予定者」を生産する機械なのではないだろうか。

---

16) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.173.

3　権力の所在と非行者

さて、ここでは処刑の力学について、ロンブローゾの類型論とは別の見地から考察していく。ミシェル・フーコー Michel Foucault（1926-1984）によれば、刑罰としての拷問とは、君主制の法および君主権力の行使と結びついていた。重犯罪者に広場で拷問を加えつつ処刑するようなやり方は、当時の権力のあり方を反映している。王という特定の身体が発する言葉がただちに法であるとすれば、法に背いた犯罪者は直接の犠牲者以外に君主をも傷つけたことになる。したがって、損なわれた法の権威を回復するために、犯罪者が見せた「極度の残忍性 atrocité」[17] を圧倒するような懲罰でもって犯罪者の身体を破壊し、君主を傷つけた者に対して直接反駁したのである。[18] 処罰とは、はなはだしく暴力的で、儀式的で、公的で、見世物的なものであった。処罰の目的とは、見せしめにすることだけではなく、犯罪者を侮辱し攻撃する方向に群衆を扇動し、彼らを君主の復讐の遂行に参加させることにあったのである。すなわち、身体刑の儀式では中心人物は民衆なのであって、彼らが処刑の場に居合わせることが儀式の仕上げにとって必要不可欠なのである。[19] したがって観衆がいなければ、処罰はその目的を見失ってしまう。

この『流刑地にて』においてはどうであろうか。前司令官が生きていた頃には、「ただ見物するために集まってきた」人びとが「すでに処刑の前日には谷じゅうに満ちあふれて」[20] いたほどだったにもかかわらず、新司令官が権力を握って以降は、「死刑執行に対する関心」が「それほど大きくはない」[21] のが現状で、実際に士官と探険家と囚人と兵士の 4 名しか処刑に立ち会っていない。すなわちこの公開処刑では、君主権力の行使を体感できる立場にいるのは、体制側でもなく被告人でもない学術探険家ただ

---

17) ミシェル・フーコー：『監獄の誕生－監視と処罰』、田村俶訳、新潮社、1977 年、59 頁
18) 同上、51 頁
19) 同上、60 頁
20) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.177-178.
21) Ebd. S.161.

一人であり、同時にその探険家はこの処刑制度に否定的であるという、甚だ滑稽な場面設定となっている。

フーコーは 18 世紀以降、すなわち近代の「処罰」権力と「監視」権力との関係に言及している。処罰に端的に現われる「体刑」権力、すなわち君主のもつ「専制」権力に対抗して啓蒙時代に登場したのが、この「処罰」権力と「監視」権力であった。「処罰」権力とは社会契約に裏打ちされ、法体系によって支えられる「法律」権力のことである。そして「監視」権力とは、人びとを管理し、そしてまた操作する技術によってもたらされる「調教」権力のことを指している。それでは、『流刑地にて』における「法律」権力と「調教」権力はどこに存在するのであろうか。士官は学術探険家に対して、この囚人は自分の判決内容どころか、有罪であることすらも知らないのです、と説明している。驚きを隠せない探険家は、囚人に「弁解する機会が与えられねばならなかったはずだ」[22] と主張する。それに対して士官はこう反論している。

> 判決を下す際に私が従っている原則とは、罪にはいつも疑いがない、というものです。他の裁判はこの原則に従うことができません、というのも、他の裁判は多人数ですし、そしてまたその裁判の上にさらに上級審があるからです。しかし、ここではそうではありません、あるいは少なくとも前司令官の頃はそうではありませんでした。[23]

このくだりからわかるように、この流刑地には裁判所が存在していない。被告人は処刑の現場で判決の図案が背中に彫り込まれる瞬間まで、自らの罪を認識することがないのである。確かに処刑に立ち会う士官は、前司令官の下で裁判官に任命されていたが、弁護の機会も与えられずに判決が下されるというこの司法機構において、その役割は啓蒙時代以降の「法律」権力とは一線を画すものである。それでは「調教」権力はどうだろうか。この士官は判決の手順を忠実に実行に移すだけのいわば処刑執行者に過ぎ

---

22) Ebd. S.167.

23) Ebd. S.168.

ない。また、一人佇む兵士にも士官と同じく権力の片鱗は見当らない。すると「調教」権力は、実はこの処刑に急きょ立ち会うことになった、主人公である学術探検家に宿っているのではないかという仮説が成り立つのである。

ここで「調教」権力、すなわち「監視」権力について、フーコーの指摘に倣って監獄の構造の見地からもう少し考察を試みたいと思う。18 世紀以降の監獄とは、犯罪者を収容すると同時に、その者を拘禁することでそれまで保証されていた自由を奪い、その者を矯正し、変容させることを目的とした装置だった。監獄に限らず、学校、病院のような、近代に誕生した多数の人間を収容する施設の中では、すでに述べたような「調教」権力が作用している。すなわち、人々はある決まった振る舞いをするように求められ、それに従わない場合には従うように矯正される。そして人々がふさわしい振る舞いをしているかどうかをチェックするために、つまり規律が貫徹されているかどうか調べるために、監視のための装置が必要となってくる。ジェレミ・ベンサム（1748-1832）が考案した、パノプティコン（一望監視施設）[24] を、フーコーはそうした装置の一例とみなした。パノプティコンは、周囲には円環状の建物を、その中心には塔を配して、円周状の建物につくられた一つひとつの独房を、窓を通して監視できるように設計されている。[25] 中央の塔にいる監視人が収容者を見ることができるのに対し、囚人側からは監視人を決して見ることができないという具合に、視線を一方化するようにこの装置はつくられている。これによって、収容者はいつ見られているかを認識できず、結果的には、常に見られているという前提で行動しなければならなくなる。一方、監視人には常に監視し続ける必要がないだけでなく、たとえ塔にいなくとも、そのことを囚人に気づかれることがない。誰が権力を行使するかは重要ではなく、「権力の自動的な作用」[26] がこの装置によって保証されるのである。

「権力の自動的な作用」に納得できず具体的な権力の主体を探す場合、そ

---

24) ギリシャ語で「すべてを見通す眼」の意。
25) ミシェル・フーコー：『監獄の誕生－監視と処罰』、202 頁
26) 同上、203 頁

れは中央の塔にいる監視人などではなく、パノプティコンを設置した国家レベルの権力者である、という意見も出るかもしれない。しかし、コンビニエンス・ストアの監視カメラが、国家権力の策謀によって設置されていると強弁することにあまり意味がないのと同じように、[27] 当論文においても、流刑地の属する国家の権力について問うことはしない。

しかし、実際に監獄が果たした役割は別のところにあった。監獄は非行を隠蔽することで温存し、再犯をも誘発させ、一時的な「法律違反者」だった囚人を常習的な「非行者 délinquant」に転化させるような、閉鎖的な環境をつくっていたのである。ここでフーコーの用いる「法律違反者」と「非行者」は全く異なる水準にある。「法律違反者」とは刑事司法の言説が対象とする犯罪者であり、いわゆる司法機構によって有罪を宣告された者を指している。そのため『流刑地にて』で処刑される囚人をこれに当てはめることはできない。一方、「非行者」は監獄という行政装置が対象とする囚人を指している。「非行者」はその者の具体的な犯行によって規定されるというよりも、むしろその者の生活態度によって特徴づけられている存在とみなすことができる。[28]「規則などへの違反、規則に妥当しない一切の事柄、規則を離れる一切の事柄であり、逸脱」、すなわち「不適合なもの」という明確ではない領域が処罰されるのである。[29]これはまさに、勤務怠慢と上官侮辱という罪で処罰される囚人の扱いそのものではないだろうか。

カフカの描く流刑地にも、流刑地という性質上、おそらく本国から犯罪者たちが集まってくるが、その時点では彼らは単に「法律違反者」に過ぎない。しかし、小舟に乗らないと入ることも出ることもできないこの隔離された流刑地に身を置くやいなや、彼らは巨大な監獄に閉じこめられた「非行者」へと姿を変えるのである。

しかもこの種の装置は、装置自体は閉鎖されているものの、「外部世界

---

27) 杉田敦：『思考のフロンティア－権力』、岩波書店、2000 年、34-35 頁
28) ミシェル・フーコー：『監獄の誕生－監視と処罰』、249 頁
29) 同上、182 頁

の永続的な現存」[30] が排除されているわけではない。外部にいる誰もが中央の塔にやってきては囚人を監視することができるうえに、その監視機能の働きを確認することも可能である。流刑地にやってきた探険家はこの一例だと考えられる。彼は「この流刑地の民ではないし、この流刑地が属している国家の民でもない」[31] 外部の人間である。しかし、本来の権力所有者と考えられる新司令官の依頼のもとで処刑に立ち会った瞬間、パノプティコンの中央の塔に登ったがごとく、この探険家に「監視」権力が宿るのである。

「非行者」がすでに存在するからこそ、監獄が彼らを幽閉し、そこで彼らの生活態度を矯正しているように見える。しかし前述のように、ここには重大なパラドックスが生じている。実際は全くの逆で、監獄自身がその行政装置を通じて危険な「非行者」を生み出し、再犯を含めたあらゆる違法行為の可能性をもつ者として、いわば「犯罪予定者」として社会に循環させているのである。[32] ここで先ほどの仮説に立ち戻り、学術探険家に「監視」権力が備わっているとすれば、彼は「法律違反者」を監視しているのではない。彼の行為は全く逆のベクトルで、「犯罪予定者」を生産していることになるのである。

ロンブローゾの指摘にあったように、処刑機械が刺青のように判決を身体に書き込むことは、その囚人の内面に潜み、将来犯罪として表面化する可能性のある「徴候」を、具現化する行為だと考えられる。そして、探険家も同時に流刑地という監獄の機能を利用しながら「非行者」を生みだしていく。まさにカフカの描く『流刑地にて』、過去の犯罪に対する「法律違反者」は処罰されることはなく、その代わりに未来の「犯罪予定者」がつくり出されていくのである。

---

30) 同上、208 頁

31) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.175.

32) 監獄での拘禁が再犯を生みだすという事象は、以下のデータによっても証明される。「中央監獄を出た者のうち 38 パーセントはふたたび受刑者となり、徒刑囚のうち 33 パーセントがそうなる」ミシェル・フーコー：『監獄の誕生－監視と処罰』、264 頁より

ところが、この探険家は自らが所有している権力について全く把握していない。士官は流刑地での処刑制度を存続させるために、探険家に新司令官への口添えを依頼するが、それに対して探険家はこう答えている。

> あなたは私の影響力を買いかぶっています、司令官は私の紹介状を読みました、したがって私が裁判法の専門家でないことを彼は知っています。もし仮に私がある意見を口に出しても、それは一私人の意見で、誰か他の人の意見よりも重要なわけではありません、そしてどのみち、わたしの推測によるとこの流刑地においてたいそう広大な権限をもっている司令官の意見よりは、はるかに意味のないものなのです。[33)]

> そんなことは全く不可能なのです。わたしはあなたに不利益を与えることができないのと同様に、あなたの役に立つこともできません。[34)]

権力について把握しようとするとき、「国家の主権とか法の形態とか支配の総体的統一性」[35)]を前提としてはならない、とフーコーは提案している。権力を上部構造のようにみなして局在化し、支配者と被支配者の二項対立を前提とすることや、また、権力関係全体を司る絶対的な存在を想定することは、権力関係をとり逃すことに繋がるからである。そして、こうした権力の超越化とはおそらく、支配者側が意図的に創り出すものではなく、被支配者側、もしくは権力を有していながらもそれを意識下に置いていない者の自己把握に因っていると考えられる。そういった者たちが、自分は権力の外側にいると思い込むとき、権力は超越的なものとなり、時には特定の権力者または権力機関のうちに局在化されて、現実の権力関係は見失われてしまうのである。

---

33) Kafka, Franz: In der Strafkolonie. S.181.
34) Ebd. S.182.
35) ミシェル・フーコー：『性の歴史Ⅰ　知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、

4　おわりに

『流刑地にて』においても権力者は権力を独り占めにしてはいない。新司令官と士官は「法律違反者」を処罰する権力を有し、その一方で探険家は「犯罪予定者」を生産する権利を有している。そして、権力を有しない、ないしは探険家のように自らが権力を有していないと誤解している者も含めて、すべての存在は同じ水準の権力関係の中で生きているのである。その結果として、絶対的権力者は姿を潜め、その者がもつ「専制」権力または「処罰」権力のイメージも薄まっていく。反権力の行為はその力のやり場を失い、最後には抵抗を諦めるのである。以下に引用する、冒頭に見られる囚人の様子にもその状況が表れている。

> ところで、囚人はたいそう犬のように従順な様子で、それはまるで、彼を束縛することなく山腹をあちこち走り回らせておいてもかまわないような、そして死刑執行が始まるときに、彼が戻ってくるようにただ口笛を吹きさえすればよいかのようであった。[36)]

つまり、誰もが権力の内側にいるのであって、そこに支配者と被支配者の二項対立構造は形作られていない。士官が一見すると権力側から、権力を行使される側に自らの意志で立場を移すのも、このように権力構造を捉えることで、必ずしも滑稽な豹変ではないように思われる。そしてその場においてなお、学術探険家は自らのもつ「監視」権力を認めることなく、終始沈黙を貫き通すことで結果的にその権力を行使することになるのである。

本論では、ロンブローゾの犯罪類型論を引き合いに出しながら、処刑機械がその針を用いて刺青のような判決を囚人の身体に書き込むことは、その囚人の内面に潜み、将来犯罪として表面化する可能性のある「徴候」を、具現化する行為なのではないかと論じた。そしてさらに、フーコーの権力論を引用し、この流刑地という監獄の中では「法律違反者」を矯正するの

ではなく、探険家が「監視」権力、すなわち「調教」権力を行使して「非行者」を生みだしているのではないかと論じた。従ってカフカの描く流刑地においては、過去の犯罪に対する「法律違反者」が処罰されることはなく、その代わりに未来の「犯罪予定者」がつくり出されていくことが、この二つの側面から検証できるのである。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中）

Doppelproduktion des voraussichtlichen Verbrechers „In der Strafkolonie“

—geborener Verbrecher und Delinquent

TERADA, Yusuke

Es war Anfang Oktober 1914, als Franz Kafka(1883-1924) die erste Korrektur der Erzählung „In der Strafkolonie“ beendete. Die Grausamkeit und unwirksame Methode dieses Apparates, der das schriftliche Urteil in die Haut des Verurteilten einschneidet und gegen die bisherige Hinrichtungsart scharf abgegrenzt wird, verbinden sich mit der Komik, in der öden Strafkolonie die Deklarationsarbeit zu leisten. In solchen Dingen hältet sich eine bestimmte Eigentümlichkeit versteckt.

Man vergleicht oft „In der Strafkolonie“ mit „Le Jardin des Supplices“ von Octave Mirbeau(1850-1917), dem französischen radikalen Journalisten, wenn man von der genauen Beschreibung der Hinrichtung aus argumentiert. Bei Mirbeau beschreibt ein französischer Forschungsreisender Begebenheiten, die er auf einem chinesischen Hinrichtungsplatz erfuhr: die dort außerordentlich „verfeinerten“ „grausamen“ und „schönen“ Hinrichtungen stoßen ihn ab und bezaubern zugleich. Mirbeaus Erzählung wurde 1902 ins Deutsche übersetzt. Kafka-Forscher Klaus Wagenbach(1930-) rechnete im Verzeichnis der Büchersammlung Kafkas den Namen Mirbeau ein: wahrscheinlich las Kafka diese Erzählung. Was er von Mirbeau übernahm, war wohl der Einfall, durch die gräuliche Hinrichtung aus einem menschlichen Körper ein Kunstwerk hervorzubringen.

Mark Anderson(1955-), amerikanischer Kafka-Forscher, hat zur Deutung dieses Apparates „in der Strafkolonie“ den Verbrechenstyp zitiert, den Cesare Lombroso(1835-1909), italienischer Kriminologe, vorgeschlagen hatte. Er richtete sein Augenmerk darauf, dass der Apparat den Rücken des Verurteilten bearbeitet, und folgerte, dieser Vorgang sei der Prozess der Kunst-Schöpfung. Beim

Verbrechenstyp von Lombroso interessierte besonders, dass er Verbrecher mit Künstler verband. Diese zwei äußerlich einander widersprechenden Menschen verbindet der Vorgang des „Schreibens“. „Graphomania“ lässt sie Schriftzeichen und Zeichnungen in alle Dinge einschreiben, deswegen tätowierten sich Verbrecher am ganzen Körper, erklärte Lombroso. Äußere Merkmale wie Tätowierungen werden dabei für das Innen verbergende verbrecherische „Anzeichen“ gehalten.

Demzufolge sind die Hinrichtungen, die in der „Strafkolonie“ vollgezogen werden, keine Bestrafungen, die den Verhältnissen entsprechend dem „Rechtsbrecher“ auferlegt würden. Sondern sie sind Offenlegungen des im Innern verborgenen verbrecherischen Charakters, durch äußere Merkmale, die dieses Verbrechen zeigen, wenn sie in die Haut eingeschnitten werden. Es ist eine allzu entmenschte Strafe, nur infolge der Schuld durch „Ungehorsam und Beleidigung des Vorgesetzten“ den Tod des Verurteilten herbeizuführen. Die Zeichnungen, die der Apparat in den Verurteilten einschneidet, sind nämlich kein Kennzeichen, sondern „Anzeichen“, das sich im Verurteilten versteckt hält und in der Zukunft als Verbrechen ans Licht kommen kann. Meiner Meinung nach ist es die Maschine selbst, die den voraussichtlichen Verbrecher produziert.

Nach Michel Foucault(1926-1984) zeigt die archaische Hinrichtung auf freiem Platz und mit grausamer Folter offen, wie die damalige Gewalt gesehen sein wollte. Denn der Zweck der Bestrafung war nicht nur die Warnung, sondern es galt auch, die Menschenmenge aufzuhetzen, die Verbrecher zu beleidigen und anzugreifen und somit an der Rache des Herrschers teilzunehmen. Die Hauptperson dieser körperlichen Hinrichtung ist der Zuschauer, dessen Anwesenheit unentbehrlich ist. Aber in der „Strafkolonie“ ist „das Interesse für diese Exekution“ „nicht sehr groß“, nachdem der neue Kommandant an die Macht gelangt ist. In Wirklichkeit sind nur vier Personen anwesend: der Offizier, der Forschungsreisende, der Verurteilte und der Soldat. Bei dieser Hinrichtung ist es darum nur der Forschungsreisende, der weder zur Anklage noch zum Angeklagten gehört und deshalb einen unabhängigen Standpunkt einnimmt, um die Ausübung der Souveränität wahrzunehmen.

Nach Foucault war das Gefängnis seit dem neunzehnten Jahrhundert eine Einrichtung, deren Zweck ist, den Verbrecher in Haft zu nehmen, ihm die Freiheit wegzunehmen, um ihn zu bessern. Aber das Gefängnis verbirgt die Delinquenz und bewahrt sie, verursacht damit den Rückfall, indem es die geschlossene Umwelt bildet, die den gelegentlichen „Rechtsbrecher“ in den „Gewohnheitsdelinquenten“ umwandelt. Mit dem „Delinquenten“ ist der Gefangene, der weniger von seiner konkreten Tat als vielmehr von seinem Leben bestimmt wird, gemeint. Meiner Meinung nach deutet das eben auf den Verurteilten, dessen Tod infolge der Schuld durch „Ungehorsam und Beleidigung des Vorgesetzten“ herbeigeführt wird. Wahrscheinlich werden viele Verbrecher in Strafkolonien versammelt, obwohl sie nur „Rechtsbrecher“ sind. Sie haben sich kaum in dieser Kolonie niedergelassen, die von ihrer soartigen Lebenswelt isoliert ist und deren Zugänge alle überwacht sind, und schon werden sie in „Delinquenten“ verwandeln, die im Gefängnis eingeschlossen sind. Das Gefangnis selbst produziert so durch seine eigene Einrichtung den gefährlichen „Delinquenten“ und entlässt ihn dann als den voraussichtlichen Verbrecher, der gegen das Recht handeln kann, in die Gesellschaft.

Indem der Apparat wie bei der Tätowierung das Urteil in den Rücken des Verurteilten einschneidet, verwirklicht er das „Anzeichen“, das in der Zukunft als Verbrechen ans Licht kommen kann. Und zu gleicher Zeit bestätigt der Forschungsreisende, der als Zuschauer hier die Macht der „Überwachung“ hat, den „Delinquenten“ als solchen, indem er die Funktion der Strafkolonie als Gefängnis beglaubigt. Von diesen zwei Seiten her wird daher bestätigt, dass in der „Strafkolonie“ nicht der „Rechtsbrecher“, in Bezug auf vergangene Verbrechen, bestraft, sondern vielmehr der zukünftige, voraussichtliche Verbrecher selbst produziert wird.